

# 「学級担任と特別支援学級担任の連携による支援のあり方」

～コーディネーターの役割からの考察～

学籍番号 (219214)

氏名 (辻 貴博)

主指導教員 (岡田 和子)

副指導教員 (庭山 和貴)

## 1. 課題と目的

### 1.1 研究の背景と目的

特別支援教育コーディネーター制度が導入され10年以上が経ち、特別支援教育コーディネーターに求められる役割が変化してきていることを踏まえ、現在の特別支援教育コーディネーターに求められるものを、明らかにしていこうと考えた。特に、実習校では、校内体制や会議の持ち方に課題があると考え、学級担任と特別支援学級担任が連携していくこと、支援方法や授業・教材づくりのなどを共有し、協働して働くことができるような体制づくりを見直す必要性が課題としてあった。特別支援教育コーディネーターとしての業務の見直しや会議の持ち方について実践しながら、より良い方法に改善していくことを研究の目的とした。

## 2. 研究の実践

### 2.1 方法

特別支援教育コーディネーターの業務における実態調査から、特別支援教育コーディネーターの役割を整理する。特別支援教育コーディネーターとして、教員から求められている働きを明らかにするために、教員の聞き取りを元に、課題を見出す。次に、実習校の教員を対象に、教員間の連携の期待と不安についてアンケート調査を実施する。アンケート調査は2回行い、値の変化の分析をし、教員が求めるコーディネーターとしての役割を明らかにしていく。

### 2.2 基本学校実習 I

特別支援教育コーディネーターの1日の業務を記録し、特別支援教育コーディネーターの多忙感によるコーディネート業務が行えない実態について調べることにした。次に、児童の実態にあった支援をどの担当者が行うとよりよい支援ができるかを把握するため、特別支援学級担任の支援の観察と聞き取りを行った。

### 2.3 基本学校実習Ⅱ

特別支援教育コーディネーターが学年主任を中心に、学級担任らと5分でも、立ち話でもいいので、コミュニケーションを取るためのミーティング、プチミーティングを週に1度を目標に行った。また、週に一度の特別支援学級担任との打ち合わせ会を新たに実施した。特別支援サポーターにおいても、情報共有をしてもらうために、連絡ノートの作成と、それに打ち合わせ会のメモを添付し、子ども一人ひとりの支援が必要な項目について確認ができるような形にし、支援の不備を防ぐように取り組んだ。

### 2.4 実践課題実習Ⅰ

特別支援教育コーディネーターの多忙さと校内外での連携の仕方の難しさが課題と考えた。そこで、教職員が連携し、チーム援助をすることに対する期待と不安を調査し、それをもとに特別支援教育コーディネーターがどう働きかければ連携が上手くいくかを検討することにより、解決策を見出せるのではないかと考え、『教員間で連携することへの期待と不安について』調査し、分析することとした。

### 2.5 実践課題実習Ⅱ

実践を続けていたプチミーティングの成果が、1回目のアンケート調査では、少しずつ表れてきているように感じた。そこで、期間をおき、再度、教員間の連携の期待と不安についてのアンケート調査を行い、1回目のアンケート調査との変化を見ていくことにした。

## 3. 総合考察

アンケート調査結果から、経験が浅い教員は、他の教員に助けを求めたり、一緒に問題解決をしていくことに対して頼らざるを得ない部分が多いため、若手教員ほど支援が必要であると考えられる。また、若手教員ほど多くの教員と連携したい気持ちがあるが、自身の力量を知られる不安が大きいことも分かった。若手教員が自分の意見や考えを自由に発言できる職場環境を整えることも、コーディネーターとしては考えていかなければならないと感じた。そして、経験年数に関係なく、連携や協力するメンバーとの相性が教員間で気になるという結果が出た。

特別支援教育コーディネーターとして、不安なく連携を行うために、各教員の得意なことや苦手なことを把握し、教員間をつないでいくためには、プチミーティングで得た情報を、関係する教員と共有することで、連携に関する不安を解消していけると考えた。

これらのことから、特別支援教育コーディネーターとして、プチミーティングから、特別支援学級担当の打ち合わせ会へつなぎ、連携について研究を深めた。